game over

砂糖味の傷

色んな悪運が重なった結果だった。

赤信号で車は止まっていたし、「これからどこ行く？」と尋ねた百の視線は私の方に向いていた。そして、ふたりの間にあった私のスマホを灯らせたのは千くんからのラビチャだった。

「えっ。ユキから？」

まずい、と反射的に悟ったのと同じタイミングで、百の低い声が降る。慌てて隠すのもわざとらしく、ラビチャの着信音はそのまま二度軽やかに響いて止まった。

後に残されたなんともいえない沈黙を、冷や冷やしながらやり過ごす。その間に信号は青になり、恐ろしいほど音もなく滑らかに車は前進する。

「オレと会ってるときにやり取りするほど仲良かったっけ？」

「……タイミングはたまたまだよ」

「てか、いつの間にラビチャ交換してたの」

「この前、三人で食事した時。覚えてないの？　まあ、百はだいぶ酔ってたけど」

「えっオレもいたの！？」

「うん、ばっちりいた」

「あっそう……」

決まり悪そうな百の頬は、ほんのりと朱に染まっている。年下の男の子という事実を感じさせないくらいスマートな振る舞いをするくせして、こういうところは若干間が抜けている。年上の男の人といると味わえないようなくすぐったい気持ちになれて、私は新鮮で愛しいけれど、指摘すればきっと百は顔をしかめるのだろう。

「別にやましいこと喋ってないよ。ずっと百の話してる。見る？」

「携帯見る趣味とかないのにさ～……。ていうか、オレの話ならオレのいるとこですればいいじゃんか」

「え～、だって百うるさいんだもん」

「ひっ……どくない！？」

「私は完璧じゃない百の話もいっぱい聞きたいよ。そういうところも好きだもん。その手の話は千くんから聞くのが正解でしょ？」

言いながらラビチャのトークを開いて百に差し出す。ちょうど次の赤信号に捕まりそうな頃合いだった。

「……『千くん』って呼ぶんだ。ユキのこと」

「他になんて呼んだらいいのよ」
「うーん、呼んじゃ駄目とは言わないけど」
——私のスマホを受け取った百の指の速さは見事だった。
目を疑って二度見したが、もうそこにトークの履歴は残っていない。千くんの連絡先ごと、一瞬で抹消されてしまった。
「オレが勝手に妬いちゃうだけ。はい、携帯ありがとね」
「え、ちょっと」
「ユキにはオレから言っとくから心配しないで」
やわらかく笑っているように見せて、百の表情は若干ぎこちない。自分で自分に戸惑っているようですらあった。ぽっと出の彼女の、根拠のない勘でしかないけれど。
愛されている、ことになるのだろうか。こういうのもカウントしていいのだろうか。
……遠慮のない嫉妬を、鬱陶しいなんて微塵も思えない。むしろ嬉しいんだからどうしようもない。
「もう今からオレんちおいでよ」
「え、もう行くの？」

「ん。外じゃキスもできないもん」
運転席から伸びた百の腕がこっそりと力強く、私の腰を艶かしく抱き寄せる。
誰にも見つからないように、ひっそり熱を燻らせるふたりの時間だって、実はたまらなく好きだった。百はごめんねなんて眉を下げて謝るけれど。これも百と付き合うことがなかったら知らなかったはずの感情だと思うと、ますます愛しい。
「誰にも取られたくないのに」
「ふふ。なら、手放したりしないでね」
「言うじゃん。……絶対逃がさないから」
熱が腰から剥がれた瞬間、目に見えて景色が流れる速度がぐんと上がる。その単純さに笑いそうになった。
無邪気なふりをしたまま、彼の内にある牙を余すことなく暴いてしまいたかった。ひどい女だと自嘲しながらも、私は彼にならいくらでも傷付けられたいと思ってしまうのだ。——その傷さえも、きっと性懲りもなく愛してしまうだろうから。

檻の中にて

自分の腕に包まれて、彼女はリラックスしきって眼を閉じている。
不安と安堵がちょうど半々、混ざらないままどろどろに溶けた気味の悪い毒のような感情をその表情に抱く。好きだよ、と心の中で必死に囁いた。声に出さずとも届くように。喉から溢れた怪物が彼女を襲ってしまわないように。
『もうおしまいにしよっか、百』
『もっと大事にしてほしかった』
『ごめんね。百も幸せになってね』
〝私以外の誰かと〟
気を抜けばすぐ瞼の裏で穏やかに流れる、今朝見たばかりの悪夢に身を委ねる。
ただの夢だよ。だから大丈夫。そんな慰めじゃもう追いつかない。行かないで、と、そっか、が、ちょうど半々。絶叫と諦めに板挟みにされていることも露知らず、彼女は相も変わらず寝息のリズムで胸を上下させていた。
オレ以外の誰か、なんて一瞬たりとも想像しないでほしい。どれだけそう望んだって、

彼女の心まで手に入れることはできない。だからこそこんなにもこの子を愛おしく思えるのだろう。

そうわかっていても、綺麗事はもう聴きたくない。

「好きだよ」

「わたしも」

微睡みの中から覚めたばかりの彼女の瞳には透明な膜が張っていた。口元にはやわらかな微笑が浮かんでいる。乱れているその髪を指の間で梳きながら、彼女を抱く腕の力をいっそう強める。

ねえ、……とびっきり優しくするって、世界一の楽園を約束するからさ。

「このままとじこめてもいい？」

「ん、ふふ、……いいよ、百になら」

揶揄だと思い込んでいる彼女は無邪気にオレの身体を抱き返す。オレだってそれだけで満足したかった。だからそっちが悪いんだよ、と詰りたくなって、そこまで最低にはなりたくなくて、結局なにも言えない。

はぐらかすように軽すぎる身体を抱き上げる。上ずった歓声を上げた彼女の声はまだ

はしゃいでいる。

そのままずっと笑っててよ。――その笑顔を今から壊そうとしているくせに、そんな浮ついた願いを唱える。

その部屋を準備したのは一体いつの話だっただろうか。日の目を見る日が、できれば永遠に来なかったらよかったのだけれども。

「なに？　ここ。こんなとこあったっけ」

「うん。内緒の部屋」

「すごい、まあまあ広くない？」

「気に入った？」

「ん？　ん……」

疑問を含んだ返事は淡い口付けに溶かした。連れ込んだその身体をベッドに下ろして、そのままベッドサイドの電灯を灯す。目を閉じてキスに応える彼女はすでにほとんどその気になってしまっているらしい。こんなときまでかわいらしくて嫌になる。まだ戻れるよ、と残った理性は不安げに囁く。

もう遅いよ、と呟いていた。なあに、と甘い発音が尋ねる。ただの睦まじい恋人同士

の空間に、まるで似つかわしくない雑音が混じる。――フローリングを滑る鎖の音は、ひとりで聴くときよりもよっぽど重たく耳に刺さった。

「も、も？」

金属質な音が、彼女の信頼をひとつひとつ裂いていく。好きだよ、と贖罪のように呟いていた。全部全部、好きだからなんだよ。

「なにこれ。すごい。わざわざ準備したの？」

横たわった姿勢のままで手首と手足を繋がれてもなお、彼女は興味深そうにオレを見上げていた。吐き気のような罪悪感が肺を潰す勢いで迫り上がる。ただここにいてほしくて、本当にそれだけだったんだよ。裏切りたいわけじゃ、なかったんだよ。

言い訳がましくて笑いが込み上げそうになる。百のわらった顔が好き、と頬に触れる彼女の指の温度を今思い出してしまうのは神様の皮肉だろうか。

「うん、そう。このために準備した」

「ほんと凝り性なんだから。おもちゃみたいだけど、意外と頑丈なんだね」

だっておもちゃじゃないから、それ。

多分一生かけて引っ張ったって千切れないんじゃないかな。だから逃げたくなっても

逃げられないんだよ。――ねえ、わかる？

オレがその気になれば、一生このままなんだよ。

「頑丈っていうか、取れないよ、それ」

「え、……どういうこと？」

「鍵、捨てちゃったから。もう取れない」

「嘘」

「嘘じゃないよ。もーう、ちゃんと言ったでしょ、閉じ込めるって」

「百？　ねえ、や……、待って」

「なーんちゃって！　冗談冗談！　って、言ってほしい？」

目の前の瞳が、動揺に染まる。心底怯えた顔なんて、こうでもしなきゃ知ることはなかっただろう。そう思うと不思議な快感が腹の底を流れる。彼女の全部を知りたかった。オレが知らないこの子の顔なんて、この世のどこにも存在しないでほしい。

「ごめんね」

「……ほんとに嘘じゃないの？」

「そうだね」

「ずっとこのままでいたいの？」
「うん。もうどこにもいかないで」
「百はそれがいちばん幸せになれる方法だって思ってるの？」
こんなときまでオレに優しくできる子だから、ここまで好きになった。それも真実のうちのひとつだった。
荒んだ目尻に嘘くさい涙が滲む。大事に大事にしたかった。その気になればすぐに握りつぶせてしまうようなありふれた日常を、名前が売れるにつれて手放すしかないと思い込んでいた普遍の幸福を、その両方を与えてくれた彼女のことを、大事にしたかったのに。
いつだって気付くのは壊した後だ。脇目も振らずに底まで落ちてふと見上げた時にようやく、かつての光の美しさを知る。
「幸せだよ。ずっとこうして、思う存分ふたりでいられたら」
白い手のひらで、彼女は自分の目を覆った。冷酷な鎖の音が、耳に馴染み始めているのがおそろしい。
「でも、そんなのやっぱやだよね」

足首を縛る銀色の、ちいさな鍵穴を探り当てる。引き出しから取り出した小ぶりの鍵をそこに差し込んで、錠を解いた。
「えっ」
「ふふん。見事に騙されちゃいましたな、名俳優モモちゃんの演技に！」
「はあ……？！」
「まあまあ、いい刺激ってことで許してよん。はい、ぜんぶとーれた」
束の間の不自由から解放された彼女の腕に包んでほしくて身を擦り寄せる。それだけで察して腕を回してくれるんだから、オレはわざとらしく頬を緩ませる。
「洒落になんない」
「怒った？」
「噴火しそう」
「わお。避難しなきゃ」
「絶対巻き添えにしてやる」
「あっはは。じゃあふたりで丸焦げ～」
髪の間を抜けていく彼女の指が心地いい。どうして満たされなかったのかも思い出せ

ないくらいだった。これでいいじゃん。奥歯を噛み締めながら、オレはなだめるように言い聞かせる。オレだって、この子のわらった顔が好きだから。

そうやって、醜い執着ごと、ちゃんと綺麗な愛に溶かせるように濾過しようとしていたのに。

「ねえ。……本当は、本気だったんでしょ？」

深い慈愛で溢れた彼女の声音は、持ち逃げするはずだった本音を晒す。いたたまれなさに耐えきれなくて目を閉じる。背筋がちいさく震える。誤魔化すために抱きしめる。その小賢しい弱さにさえ、彼女はきっと気付いている。

そんなもの、暴いてどうするの。受け止め切れるわけもないくせに。

「何年百の恋人やってると思ってんの。そのくらいわかるよ」

「おっとこまえだねえ。きゅんきゅんしちゃう」

「馬鹿。茶化すところじゃないでしょ」

「わかってるって。……馬鹿はそっちだよ、ほんと」

清潔な白い枕にふたたび、彼女の髪が広がる。勝てない力でわざわざ荒く押し倒したオレのせいで。

「オレがいないと生きていけないようになっちゃえばいいのに」

余裕を含んだ彼女の笑みが、瞳に眩しく突き刺さる。今ここに、すぐ目の前にいるのに、恋しくて恋しくてたまらない。

「百は？　私なしじゃ生きていけない？」

答えのわかりきっているその問いにはわざわざ答える必要もない。ひたむきな眼差しに口付けで応えると「ずるい」と睨まれて頬をつねられた。

「わかんないならゆっくり教えてあげようかなって思って」

「ふふ。愛されてるね、私」

「そうだね。だいぶ。オレは好きすぎて困ってるんだけど」

「いいよ、閉じ込めても」

へ、と間抜けな息が口から抜けた。彼女はたくましく先程外したばかりの鎖を手首に嵌めている。意味がわからない。開いた口も塞がらない。ほんとに馬鹿だ、大馬鹿だ。拾ったのがオレでよかったよ。これもほんとに。

まあ、そういうノリのいいところも好きなんだけどさあ〜……。

「思う存分教えてよ。百がどのくらい私を好きなのか」

「トップアイドル相手にマジ強気だよね。オレも見習わなきゃ」
「だって付き合えるの私ぐらいだよ、こんなマジの拘束具」
この場にもっとも似つかわしくないなんとも爽やかな笑顔で彼女は言い切る。わかってくれてなによりだよ、と彼女にも自分にも呆れながら、彼女の首筋に唇を這わせた。馴染みきった夜の合図はふたりの間にとろけておちて、愛という言葉の持つ甘やかさにコーティングされた時間が始まる。
自由に動かせない彼女の身体は、一晩中不自然な歪さをありありと映していたはずなのに、まるでこれが元の形のようだった。しかも割と気に入ってしまったんだから救えない。
――愛してるよ。オレはせめて、持ちうる限りの誠意を込めて彼女の耳にそう吹き込む。瞼を閉じたままの彼女はまた微笑んだ。それはどんな悪夢さえ侵食できない、楽園の隅の隅にかくされた宝石のような笑顔だった。

後味

夢の中にいてもなお、彼の香りをしつこく覚えていて、幻を生むくらいには、私は彼を追いかけてしまっていたらしい。

気付いてはいけなかったことに、初めて気付いたのはその時だった。しっくりと馴染んでいくその事実に、もう後戻りをすることも、自分を誤魔化すことも、できそうになかった。

ぼんやりと意識が覚醒するまでの間で、彼の体温が夢の中に現れた理由に納得した。あたたかい腕の中で、身じろぎをする。布団に包まれたやさしい夜の中で、私は彼の背を抱きしめ返す。

「寝込み、襲いに来ちゃった」

「ふふ。久しぶり」

「ちょっとはびっくりとかしてよ。相変わらずなんだから」

「大袈裟なリアクションの方が楽しい？」

「……んーん、そのままでいい」

ふと温度の低くなった声でそうつぶやいた彼は、すぐに取り繕うように「もこもこパジャマ最高」と胸に強く私を抱いた。大人しく抱きしめられているこの時間も、もしかしたら次の瞬間には覚めていて、大きな過ちごと儚いあぶくのように消え去って、ふたたび平行線の関係が続いてくれるかもしれない。

百の頬に触れ、ここが紛れもない現実であることに絶望しながらも、そんなことを考えた。

「あんま乗り気じゃない？　今日は嫌？　だったら帰るからいいんだけど」

「百さあ」

彼の鎖骨を親指でなぞる。真っ白な無傷をこれからも保ち続けるであろうその場所を。

「セフレにも優しくすんのやめた方がいいよ」

自分のそことは違って、間違っても尖った八重歯に内出血の跡をつけられるはずのない、その場所を。

「惨めになるから」

今思い返せば、負担はないものの嫌になるほど生ぬるいセックスばかりだった。

本当はいつだって、こっちの事情なんて考慮する必要はないのだ。こっちがそうで

あるのと同じように。

傷をつけられるのは鎖骨だけだった。他の場所は全く清潔なままなのだ、次の日の朝になればいつも痕跡は拭い去られている。だから、実感ごと思い出せなくなったりする

百は黙り込んでいた。息苦しい沈黙が愛おしかった。やっと初めて、お互いの裸を曝け出しているようで。

「そっか」

会わない時間が恋を育てる。甘い真理は両思いの男女にだけ適用されるような都合のいいものではない。そして、百は聡い。

最初はそこがよかった。触れないでほしいところはいつも触れないでいてくれた。私の恋愛に踏み込むことはしなかったし、絶頂の後にしつこく責め立てるようなこともしなかった。そんな潔癖さを厭うようになったのは、いつが最初だったんだろう。

「オレのこと好きになっちゃった？」

だから今、取り返しのつかないとどめを刺してくれるその声が、たまらなく心地いい。

否定も肯定もしなかった。行かないで、も、やめないで、も言わなかった。言えなかった。そんなことまで全部百にはお見通しで、わかられていることも私はわかっていた。

私たちが進む道が変わらないのは必然のことだった。
「うまくやれてたのにね、私たち」
「そうだね」
「ごめんね」
「なんで？」
色のない声で百は笑った。ああ、皮を脱いだふりをしてくれていたのだ、とその眼差しでやっと気付いた。私にだけはつらつでもきらきらでもない本当の顔を見せてくれるようで嬉しかったのは、全くのぬか喜びだったのだ、と。
「なんも悪くないじゃん、誰も」
「……確かに」
ふわふわした素材のパジャマの隙間から、骨張った手のひらがするりと脇腹を撫でてくる。乾いていた百の唇は、すぐに互いの唾液に濡れた。
「いいよ。好きなことなんでもしてあげる。言うことなんでも聞いてあげる」
「キスして。忘れらんなくなる感じの」
「ええ？　いいの？」

「うん」

これまで何度も抱きついた、すべらかな首筋を優しく撫でる。こんなに好きなのに、欲しくはならない。その恋心の居場所を求めること自体が、立ち直れなくなるほどに私の胸を削ってしまうことを知っている。

「二度とあんたみたいなのに引っかかりたくないから」

「あはは。……わかった」

今日交わす最後のキスのうちのひとつを、百は慣れた手つきで私の身体をまさぐりながら奪った。ホックが外される感触さえも特別に感じた。単純な心が馬鹿馬鹿しい。それでももっと早く認めていたら、こんなに深手を負うこともなかったと思うと一瞬で涙が滲んだ。

「泣き顔いいじゃん。初めて惚れそうって思った」

「あっそ……」

百はこの夜、これまででいちばん手酷く私を抱いた。次の朝は腰が立たなかったし、どこもかしこも痛い中で半ば部屋を這いながらシャワーを浴びた。中が満たされている括られたゴムも、湿り気の残る丸められたティッシュも全部そのままだった。

しかし、それが百の最上級の気遣いだと、わかってしまう位置にいるものだから、私はこれ以上に甘い夜を知ることはきっとないのだろう。

オンリーミー

「へえ、同窓会……」
「会場遠いから向こう泊まって帰ろうかなって。休みも取れたし」
「ふうん、同窓会……」
「なにその顔」
食卓の向こう岸に腰掛ける百は、缶ビールをちびちびと舐めるように煽りながら、あからさまにじっとりと重い視線を送ってくる。
「行ってほしくないなっていう顔」
「ストレートだね」
「うん。やだもん」
私の方も発泡酒を喉に流しながら、心の中でこっそりと頬を緩めていた。申し訳ない気持ちも湧きつつ、久々に粘着質なモードだな、と若干嬉しく思ってしまっているのも否めない。
「別にただの同窓会だって。友達と適当に飲んで食べてお開きだよ」
「だって高校の同窓会ならさ、元彼とかいるんでしょ？　思い出話とか言って普通に

喋ったりしてるうちにさ、いい感じになっちゃったりするんでしょ？」
「もう。そんな人いなかったって。言ったでしょ？　百と違って高校生の時は大人しくしてたんです」
そこで途切れた会話に、おや、と思いながらも、缶に残った最後の一口を煽る。喉を鳴らすや否や、やけに温度の低い彼の瞳と視線が交わって、緩んでいた気分がかすかにこわばる。
「……へえ～。嘘つくぐらい今でも後ろめたい元彼がいるんだ？」
――うわ、ばれた。
沈黙を誤魔化そうにも、たった今飲み干してしまった空っぽの発泡酒じゃ盾にならない。
「いや……嘘……っていうか」
確かに今私は嘘をついた。でも別に後ろめたいとかじゃないのは本当のことだ。百にも無駄な心配はかけないようにと慮ったつもりが逆効果になってしまった、――なんて可愛い騒ぎで済めばいいんだけれども。
「芸能界でどんだけ揉まれてると思ってんの……わかるよ自分の彼女の嘘ぐらい……」

「……ごめんって。でも本当にそんなんじゃなくて」

というか、こんなに嫉妬を露わにしてくるタイプだったか、とこれまでのあれこれに思いを馳せながら首を傾げる。

確かに時折、――仕事が立て込んでいるときは特に――執拗に私を求めてくることはあったけれど。それでも別に普段からそうというわけではない。

そもそも、こんなに身も心も百のものなのに、まだ独占欲が満たされていないなんて末恐ろしい話だ。

「そんなんじゃないなら下手な嘘つかないでよ。心配になるじゃん」

「うん……。私が悪かったよ。ごめんね」

「……オレも、言い過ぎたかも」

眉を下げた百の笑顔に含まれた、小さな棘が私の胸に刺さる。多少のやきもちは嬉しいけれど、基本的に住む世界が違う私たちは、粉粒ほどの不安さえ猛毒になり得ることをよく知っているから。

「百だけが好きだよ」

ちゃんと彼の瞳を見つめて、自然と込み上げた笑みはきっと柔らかい。一瞬固まった

彼の表情も、すぐにほどけて笑顔に溶ける。

食べ終えた二人分の食器を重ねて、そのままふたりでシンクに並んだ。どうやら今日は一緒に手伝ってくれるらしい。心なしかしおらしい態度が可愛らしかった。

「ねえ」

「ん？」

捻った蛇口から水が流れる瞬間を、捉えることはできなかった。ただ、すすごうとした食器がシンクに落下する甲高い音だけが鼓膜に衝撃を叩きつける。

「やっぱいかないで」

私を抱きしめる彼の力が、強い。——痛い、と反射で思ってしまうくらいには。

「もうどこにもいかないで」

遠慮のない腕にかわいげなんてもう残ってやしなかった。崖から落ちかけた人間が命綱を掴むような切実ささえ孕んでいた。ここはささやかな洗い物を抱えたキッチンで、あとは眠るだけの恋人ふたりが並んでいて、穏やかの分子しか存在しない。なのに。

「過去ごと欲しいって思っちゃうよ。未来も全部。オレだけにしたい」
粉々の硝子の破片のような繊細な声音に、こっちまで胸が痛くなる。すぐそばで怯えている強い鼓動にいたたまれなくなる。私も知っているからだ。そんな風に彼のことを想ったことが、あるからだ。
手と手を繋ぐだけじゃ、互いを抱きしめ合うだけじゃ、あまりに頼りない。こんなに見ている景色が違う私たちには、あまりにも。
「ふふ。うそうそ。羽伸ばして楽しんできなよ。よそ見したら許さないけどっ」
「……」
「んも、そんな顔しちゃって。帰ってきたらいっぱい構ってよ」
「……ねえ、百」
つま先に力を込めてその後頭部を抱える。唇をかじるみたいに前のめりで口付けた。どれだけ深く繋がっても、私の不安が完璧に伝わることはない。百の不安をわかってあげられることはできない。虚しい温度に、それでも今はもたれたかった。
「百にならあげるのに。……私があげられるものなら、なんでもあげるのに」
形勢が逆転するには一瞬で十分だった。獰猛な彼の舌に深く溺れた。こんなに愛しい

この人になら、食べ尽くされたって、きっと許してしまう。

「……軽々しくそういうこと言わないでよ」

「だって本当だもん」

不服そうな視線が降って、それでも構わずにまだ抱きしめていたかった。凶暴な赤い唇に心臓が跳ねる。輪郭を通り越してうなじの方に降り落ちた瞬間、背筋が痺れて思わず体が跳ねた。いつも口内でなぞる八重歯の鋭さを、くっきりと思い出していた。

「同窓会で見せつけてやってよ」

「……も〜〜〜、大人気ない……」

「許したのはそっちじゃんか！」

洗い物あとでよくない？　とこねられた駄々にますます呆れた。黙って水を止めると、彼の微笑が視界の端でふわりと咲く。ずるいなあ、とはっきり残っている歯形を指先で撫でながら、あながち嫌だと思えない自分自身に対して一番呆れてしまっていた。

game over

Momo's dream book

二〇二三年二月二十五日　発行

発行者 ― モチカ ／ ミラーボールロマンス

サイト ― https://lmtknhy00.com

Pixiv ― 82716124

印刷所 ― ちょ古っ都製本工房様